必要な情報を適切に活用し、友達と考えを伝え合いながら課題を解決していく授業づくり

長岡市立越路小学校

１　ＮＩＥ実践のねらい

当校は、令和４年度に新潟県新聞活用教育（ＮＩＥ）推進協議会の実践校委嘱を受け、１年次は、新聞の活用場面についての成果が明らかになった。ただ、主に新聞記事の言葉や構成を活用した実践が中心となったこともあり、授業における新聞の活用方法には課題が残った。２年次の令和５年度は、１年次の反省を踏まえ、新聞記事の内容をじっくり読みながら、子ども同士で対話し、新聞の情報を読み解いたり、適切に情報を取捨選択したりしながら、自分の考えをもつことができるようになる子を目指し、改めて新聞の活用方法を探ることとした。そのためには、子どもの問いや願いを大切にした学習課題を設定し、子どもが主体的に課題解決に取り組む姿を実現していく必要があると考え、２年次は、以下の２点に重点を置くことにした。

①子どもが主体的に課題を解決するためには、どのような課題を設定すればよいか。
②新聞をどのように活用すれば、じっくり文章を読み、友達と対話しながら、自分の考えをもつことができるのか。

２年次の研究主題は昨年度に引き続き「必要な情報を適切に活用し、友達と考えを伝え合いながら、主体的に課題を解決していく授業づくり」とし、一年次の研究の成果を生かしながら授業作りを行い、目指す子どもの姿を実現していくことにした。

２　本年度実践の概要

（１）ＮＩＥ授業作り

①ＮＩＥ職員研修

６月１３日に、ＮＩＥアドバイザーである新潟大学附属長岡小学校の関慎太郎指導教諭を講師に招き、「新聞を使うよさ」と「ＮＩＥ授業構想の仕方」について研修を行った。

ＮＩＥ職員研修の様子

「新聞を使うよさ」については、新聞に載っている記事の信頼性、見出しの効能、「見たいものだけを見る」のではなくいろんな価値に触れる機会が生まれること、時間・地域を跨いだその時の社会の様子が記録されていることを職員全体で共通理解することができた。

「ＮＩＥ授業構想の仕方」については、あくまでも、児童に身に付けたい力を考えることが先で、そこに合う新聞を探すという順で授業を構想することで新聞を活用すること自体の目的化が起こりにくいこと、新聞を授業の中で使って「課題の解決に有用だった」という経験の積み重ねが大切なこと、「読みたい」「読める」となるように日常的に新聞に「慣れていく」機会を設けていく必要性を職員で共通理解することができた。

②公開授業研究

ＮＩＥ職員研修の内容を受けて、第１学年から第６学年までの全ての学年・学級で公開授業研究会を実施した。１つの実践（指導案）を基にして、検討と授業、授業後の協議を各学年３学級の中で繰り返すことで、目指す児童の姿の達成に向けて、どの場面で、どのように新聞を活用するとより効果的なのかを探っていった。

２年次の公開授業研究

期日	学級	教科	単元名（主題名）
７月 20 日	５年１組	道徳	「小学生に携帯電話（スマホ）は必要？」
９月 12 日	１年１組	国語	「うみのかくれんぼしんぶん」（１回目）
12 日	３年１組	社会	「地域の安全を守る」（１回目）
15 日	３年３組	社会	「地域の安全を守る」（２回目）
15 日	５年２組	社会	「国土の自然環境と共に生きる」）（１回目）
20 日	５年３組	社会	「国土の自然環境と共に生きる」）（２回目）
21 日	３年２組	社会	「地域の安全を守る」（３回目）
22 日	１年２組	国語	「うみのかくれんぼしんぶん」（２回目）
22 日	５年１組	社会	「国土の自然環境と共に生きる」）（３回目）
27 日	１年３組	国語	「うみのかくれんぼしんぶん」（３回目）
10 月６日	全校		ＮＩＥ研究発表会に向けての授業構想研修
11 月１日	４年２組	道徳	「これって、アンコン？」（１回目）
１日	６年１組	道徳	「園児のピアス風習でも駄目？」（１回目）
７日	４年３組	道徳	「これって、アンコン？」（２回目）
８日	６年２組	道徳	「園児のピアス風習でも駄目？」（２回目）
14 日	４年１組	道徳	「これって、アンコン？」※研究発表会
14 日	６年３組	道徳	「園児のピアス風習でも駄目？」※研究発表会
12 月５日	２年２組	生活	「しらべたことをつたえよう」（１回目）
７日	２年１組	生活	「しらべたことをつたえよう」（２回目）
12 日	２年３組	生活	「しらべたことをつたえよう」（３回目）

（２）環境整備

①ＮＩＥタイムの実施

毎週木曜日の２０分間、「ＮＩＥタイム」の時間を設定した。

各学年で設定した「新聞の活用を通して身に付けさせたい力」の育成を見越して、各学年で内容を決めて実施した。

身に付けさせたい力とＮＩＥタイムの内容

学年	身に付けさせたい力	代表的な内容
第６学年	○必要な情報を適切に活用し、友達と考えを伝え合いながら課題を解決できる。	・新聞を読み、社会問題を知る ・新聞記事の内容まとめ ・新聞記事や自らの経験・知識を基にして、問題解決の方法の話し合い（交流）
第５学年	○全体を読み取って、自分の考えをもつ。結果の原因、因果関係を読み取ることができる。	・新聞記事の内容の要約、順を追って内容の整理（手作りワークシート） ・新聞記事を読んでの自分の考えを基にした話し合い（交流）
第４学年	○正確に読み取って、自分の考えをもち、伝えることができる。	・読んで考える（手作りワークシート） ・新聞記事から問題を作ろう ・新聞記事を読んだ感想を伝え合おう
第３学年	○与えられた記事を正確に読み取り、感想をもつことができる。	・読んで考える（手作りワークシート） ・新聞記事から問題を作ろう ・左と右に分けられる漢字を探そう
第２学年	○必要な言葉を探して、見つけることができる。	・かたかなの言葉探し ・見出し当てクイズ ・記事に見出しをつけてみよう
第１学年	○大事な言葉を見つけ出すことができる。	・「の」の字探し　・「なまえ」の字探し ・隠れた言葉を探そう　・かたかな探し

②ＮＩＥコーナーの設置、「新聞ピックアップニュース」の放送

廊下や各教室に新聞を読めるスペース「ＮＩＥコーナー」を設置し、児童がすぐに新聞を読めるようにした。また、「ＮＩＥコーナー」では、児童会の広報委員会が、全校に知ってほしい、伝えたい新聞記事をピックアップし、自分たちの感想を加えて掲示した。さらに、全校から春夏秋冬、季節にちなんだ記事を全校から集め、掲示する「春ミッケ」の掲示も作成した。放送委員会では、同様に全校に知ってもらいたい記事を昼の校内放送で読み上げ、感想などを伝える「新聞ピックアップニュース」を行った。

ＮＩＥコーナーの様子

４　実践例

（１）実践１　４年１組　道徳科「これって、アンコン？」

①ねらい

新聞記事「これって、アンコン？」を読み、性別の違いによる思い込みについて考え、話し合う活動を通して、性別に関係なく、公正、公平な態度で接しようとする心情を育てる。

毎日小学生新聞

2023年（令和5年）5月9日（火）　2

つながる

あなたらしく

これって、アンコン？

今日のテーマ

「性別に対するアンコン」

「男の子だから」「女の子だから」「女の子らしく」「男の子らしく」など、性別に対するアンコンが今日のテーマです。

みなさんは、どうですか？

□「男の子だから」「女の子だから」と思うことはありますか？

□「男の子らしく」「女の子らしく」と思うことはありますか？

□「男の子なのに」「女の子なのに」と思うことはありますか？

□無意で、男女の偏見・不公平があると思うことはありますか？

□「常識の壁」の壊すときに、自分の性別を意識したことはありますか？

□社会や周囲に、「役割」が決まっていると思うことはありますか？

質問です！

みんなは、性別を理由に、何かを決めたことはあるかな？

私は、色を選ぶ時にそんなことない。

私は、洋服の色を選ぶときやん。

「将来、何になりたい？」って聞かれたときなど

性別に対するアンコンに気づくと、どんないいことがあると思う？

選択肢が増えるね！

「新しい」を大切にできる！

可能性が広がりそう！

「男の子らしく」や「女の子らしく」ではなく、ずっと、「自らしく」を大切にしましょう。

今日のこれってアンコン？

「これって、男のアンコンシャスバイアス？」と気づいたことが、日常生活に役立てられるように、家庭、地域、学校、職場等で話合ってみてください。

「アンコン」とは、アンコンシャスバイアス（unconscious bias）の略で、「無意識の思い込み」のことです。自分の中にあるものの考え方や、自分でも気づかないうちに「ついつい」とか「思うこと」は、誰にでもあることです。

アンコンに気づくと、「こだわり」が消えたり、「こだわり」は、誰の思い込みかもしれないから、挑戦してみよう！に変わったり、いいことがいっぱいあります！　一人ひとりが、イキイキと暮らしやすいために、「これって、私のアンコン？」を合言葉にしていきましょう。

「あなたらしく」では、さまざまな人を連載し、尊重するとともに、自分自身も大切にできるような知恵を伝えます。タイトルは、ダウン症のある鈴木愛太郎さんが書きました。

毎日小学生新聞　2023年５月９日（火）

②使用した新聞記事

児童にとって学びを深めるために毎日小学生新聞の「これって、アンコン？」というコラムを使用する。

教師側からアンコンシャス・バイアスを教えるよりも、児童自身が新聞を読むことで、普段、子どもたちが無意識の中で知らず知らずのうちに思い込んだり、決めつけたりしていたものは「アンコンシャス・バイアス」だったことに気付かせたい。

③本時の手立て

ア　事前アンケート結果の提示

イ　記事を読みながら線を引く活動（納得…赤、疑問…青など）

ウ　意見交換の場の設定

これって、どう思いますか？

- 男の子がピンク色の服を着ていたら…
- 男の子の髪の毛が長い、女の子の髪の毛が短かったら…
- 男の子が将来、ケーキ屋さんになりたいといったら…
- 男の子が赤いランドセルを持っていたら…
- （女の子が黒いランドセルを持っていたら…）
- 女の子が男の子の制服を着ていたら…

事前アンケート

④授業の実際

導入場面では、男女のアンコンについての事前アンケート結果を紹介した。男の子、女の子に対して「男の子は元気で明るい」「女の子はやさしくて字がきれい」というイメージがある中で、「男子がピンク色の服を着ていたらどう思う？」「女子の髪の毛が短かったらどう思う？」と発問した。「別にいいんじゃない」と言った声が上がる一方で「違和感を感じる」という意見があがり、学習課題「みんなの感じているもやもやって何だろう」を設定した。

展開場面では、自分事に引き寄せるために別教材と「心のものさし」を使い、男女のアンコンについて考えさせた。

気になった文に線を引く

自らの体験を話す

次に朝日小学生新聞の「これってアンコン？」という性別に関するアンコンの記事を読ませた。児童は、人には「無意識の思い込み」があることや「私らしさを大切にすることが大切」であることをはじめ、気になった文や初めて知ったアンコンという言葉に線を引き、理解を深めていた。その後の話合い活動では、日常生活にあるアンコンについて班で意見を出し合い、まとめる活動を行った。「区別みたいなことはよくない」という意見が出た一方で「男の子なんだから早く物を運んでと言われたことがある」「女の子らしく整理整頓をしっかりしなさいと言われた」といった実体験を話す児童もいた。

終末場面で振り返り発表を行ったところ、「決めつけをしたり、違いをしたりしないようにしたい」「自分の思うように生きていけばいいと思った」などの感想が出せれた。

本時の板書

ある児童は、授業後の新潟日報の記者からのインタビュー（2023 年 11 月 18 日）に「女の子は優しく、男の子は元気で体力があるといったことを表情や口に出していたかもしれない。性別ではなく、私らしさを大切にして過ごせばいいと改めて思った」と答えていた。児童の感想発表や振り返りカードからは、アンコンシャス・バイアスについて一人一人が真剣に向き合い、新聞記事を読みこみ、班の話合い活動を通して考えたことで授業（本時）のねらいを達成することができたと読み取ることができた。協議会では、事前アンケートで男女のアンコンについて、あらかじめ児童に問うていたことが、本時で初めて読む記事の内容を理解し、自分の考えを持つうえで有効であったという意見が出た。自らの経験と新聞記事から得た知識を照らし合わせることで、記事の内容がより自分事として理解できるものと考える。

（２）実践２　６年３組　道徳「分かり合う喜び」

①ねらい

自分たちの文化を尊重し、子どものピアス着用を認めてほしい親と、園児の安全面を考えてピアスの着用を拒否した保育園の、それぞれの考えや立場について考える活動を通して、異なる意見や立場の人を尊重し、相手を受け入れようとする心情を育てる。

神戸新聞 2019年10月07日 月曜日 面名 朝一社 14 29ページ

園児のピアス風習でも駄目？

西アフリカ出身の父、娘の「魔よけ」に一

海外の風習であっても、保育園児のピアスは駄目なの？ 神戸新聞の双方向型報道「スクープラボ」に、西アフリカ出身の男性と国際結婚し、1歳の双子の女児を育てる西宮市の女性（32）からそんな投稿が寄せられた。夫の母国では、女の子が生まれるとすぐにピアスをつけるという文化的な習慣がある。だが、入園を希望した認可保育園は安全確保を理由に「外さなければ通えない」と受け入れに条件を付けた。双方の主張、立場を取材した。（鈴木久仁子）

双子の母は、父親と同じイスラム教徒（ムスリム）で女性は仕事に就くために今年4月から2人を保育園に預けることにした。園側から呼び出しを受けた。要件は「園設書」に記入。無料通信アプリLINEを使用。

スクープラボ

保育園児の耳に合う小さなピアス。「ねじ式で、勝手に外れることはない」と母親は説明する＝西宮市内

あなたの投稿 取材します

神戸新聞社は、読者の投稿を基に取材を進める双方向型報道「スクープラボ」に取り組んでいます。無料通信アプリLINEを使用。暮らしの疑問から不正告発まで、あなたの「調べてほしい」ことをお寄せください。QRコードから進んで投稿してください。

西宮の園「誤飲困る」外すよう注文

理解得られず 入園辞退

への押印。提示されたプリントには計6項目のチェック事項が並び、その一つにこうあった。

「ピアスそのほか装飾品は園内ではずし登園します。（中略）園内ではつけず、子どもが年にはじままで」

他にも、男女問在で着替えやシャワーをすること、豚由来の食べ物や製品に触れる場合もあることなどが記されていた。

いずれもムスリムの習慣には反するが、最後は「保育については園の方針に従います」とあり、西宮市長あてに両親の押印を求めていた。

女性によると、夫の母国では、女の子は生後間もないうちにピアスをつける。「生きる証し」や「魔よけ」などの意味があるとされ、親の愛情を表現する大事な慣例という。

女性は園側に「全てこちらの習慣に合わせてほしいと望んでいるわけではない。ただ、ピアスには特別な意味があり、安全性にも問題はない」と訴えたが、受け入れられなかった。

結局、入園は辞退し、今は別の園に通う。そこでは給食の豚肉を取り除くなど一定の配慮はあるが、ピアスに関しては「（ピアスの）穴が開いたままだと、子どもに良くないことが起きるのでは」と難色を示しているという。

これに対し、西宮市保育事業課は「あくまで子どもの安全が第一。集団保育の中で、小さくてピアスを他の園児が飲み込んでしまっては困る」と説明。「海外との文化の違いについては『今後もできる範囲で対応したい』」とする。

◇

他の自治体ではどうか。取材を広げてみると、ピアスに関しては加古川市で20年ほど前につけたまま通った例はあったが、それ以外に同様の事例は確認できなかった。

今後、こうしたケースがあっても、「安全」と「異文化理解」の間で揺れる。「熟慮の結合的判断が優先される。両者に配慮する方法を働々に考えることになる」（安全性に問題がなければ、「権の問題に踏み込むことになる。柔軟な対応が求められるのでは」（姫路市）との見方もあった。

多様な考え公平に聞いて

多言語センターＦＡＣＩＬ（神戸市長田区）理事長の吉富志津代・名古屋外国語大教授の話

日本ではルールは絶対という思い込みがある。「ここは日本だから、集団だから守れ」と、協調していく上では大切だが、それが一人一人の多様な考えを公平に聞いてできた、心のこもったルールかどうかが肝心。多数者だけに有利で、それを理由に誰かを排除していないか。常に考え直すプロセスを持つことが、互いに理解し合える成熟した共生社会につながる。

(C)神戸新聞社 無断転載・複製および複写は禁止します。

神戸新聞　2019 年 10 月 7 日（火）

②使用した新聞記事

道徳の教科書で学習した「異なる立場の人の考えも尊重すること」が、簡単ではないということを児童が実感できることを期待して、神戸新聞の記事「園児のピアス風習でも駄目？」を取り上げる。実際に起きている場面に置き換えたときに、「異なる立場の人の考えも尊重する」とはどのようなことなのかを具体的に、そしてより自分事として考えさせたい。自国の文化を尊重し、子どものピアス着用を認めてほしい保護者と、安全面からピアス着用を許可できない保育園、それぞれの立場の考えが書いてある記事を扱うことで、子どもたちの思考に迷いが生じると考えられる。両者の考えを読んだうえで、自分はどう考えるかについて、友達と意見を交流する場を設定する。多様な考えに触れることで、考えをより深める姿を期待する。

③本時の手立て

ア　ＮＩＥタイムの活用

イ　異なる立場の意見が書かれた記事の提示

ウ　「心のものさし」による思考の可視化

④授業の実際

本時では、母国の風習からピアス着用を求める親と、安全面への配慮からピアス着用を許可しない園側の２つの立場が書かれた新聞記事を用意した。「ピアス着用が認められなかった」という事実のみが書かれた部分を最初に読ませ、その段階での保育園への納得レベルをワークシート

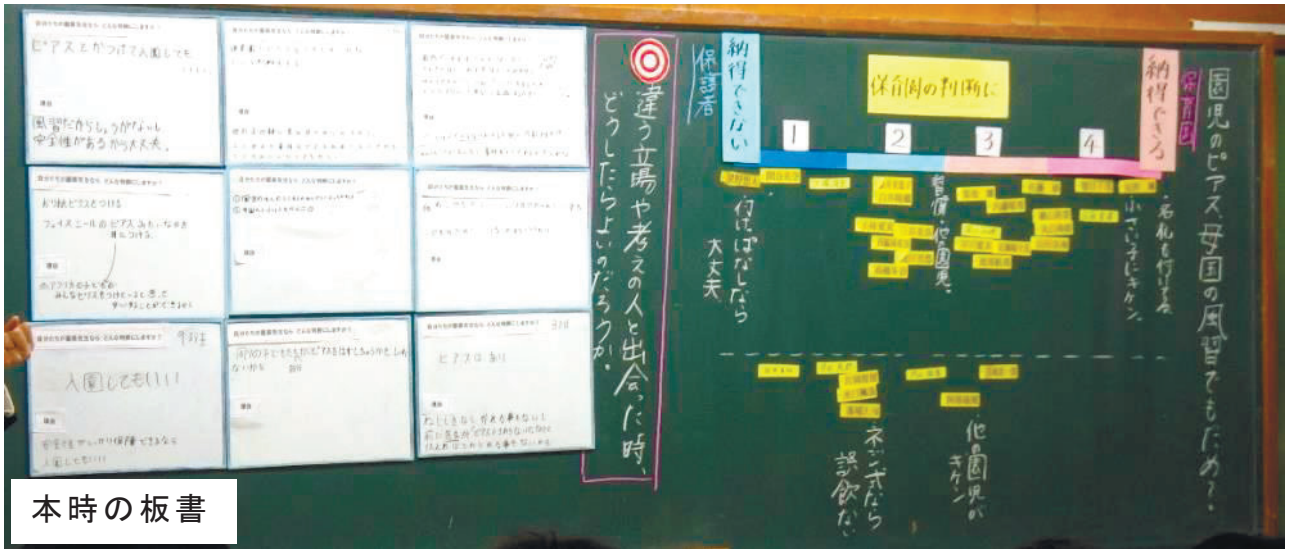
最初の「納得度」

自分が「園長なら」？

に記入した。その後記事の全文を読み、親と園それぞれの考えを整理したうえで、再度納得レベル（心のものさし）を記入した。そして、班の友達と「自分が園長先生ならどのような判断にするか」について話し合わせた。

児童は、新聞に書かれている文章を引用したり、「自分の妹の園では…」など、自分の経験に基づいたりしながら話をしていた。また、「ピアスをしていたら、他の子どもたちから何か言われるかもしれない」「そうしたら、他の園児のお家の人にも連絡すればいいんじゃないかな」など、新聞記事には書かれていない立場の人についても、考えを広げていた。これらの姿から、子どもたちは自分事として課題解決に臨んでいたと考える。

その後、自分の今の考えや、授業で学んだことについて振り返りを記述させた。子どもたちは、「相手の意見を否定せずに、まずは受け入れることが大切」「違う意見を聞くことで、一人で考えるときよりも考えの幅が広がった」などと記述していた。このような記述から、「異なる意見や立場の人の考えを尊重する態度を育てる」という授業のねらいに迫ることができたと考える。



本時の板書

協議会では、ＮＩＥタイムで記事の前半を読んでいたことで時間が十分に確保できた、「心のものさし」によって立場の違いが明らかになり、話し合いが焦点づけられたという意見が出た。新聞を基にした対話によって、物事を広い視点で捉えることの大切さを実感できたと考える。

５　成果

１年次の「ＮＩＥ授業づくり」では、主に新聞記事の言葉や構成を活用し、新聞に親しむことに重点を置いた実践が中心となった。２年次は、越路小学校の児童に見られる課題の解決に向けて、新聞の活用をした授業づくり、環境整備に取り組んだ。今年度のＮＩＥ実践を通して、以下の２点の成果が明らかになった。

（１）ＮＩＥ授業作りについて

「授業のねらい」「新聞の活用場面」「新聞の活用方法」の３つが揃うことで、児童は主体的に課題解決に向かう。

第４学年の実践では、「アンコン」とは何かを知る手段として新聞を活用し、自らの経験と新聞記事の内容を照らし合わせて考えることで、性別に関係なく、公正、公平な態度で人に接しようとする心情を育てることをねらった。第６学年の実践では、前時の学習で学んだ「相手と考えが異なる場合に、自分だけが正しいと思いこまずに、相手の立場になって考えることの大切さ」が、社会でも実際に起きていて、さらに多角的な立場の人が関わる問題でも大切なことを理解させることをねらった。どちらの実践も、ねらい―活用場面―活用方法の３つそれぞれが明確であり、学級の児童の実態に即したものであったことが、主体的な課題解決に向かったものと考えられる。

（２）環境整備について

児童が新聞に親しみ、事象への理解を深めたり、多様な見方や考え方を身に付けたりできるようになるためには、授業だけではなく、児童を取り巻く「新聞に触れる環境」の整備が欠かせない。

２年間の実践を通し、新聞活用の効果が見られた手立ては以下の４つである。

○「こども新聞」の定期購読　　○新聞社の「データベースの活用」
○帯で行う「ＮＩＥタイム」　　○意図的な「教室・校内掲示」

特に、「ＮＩＥタイム」と「教室・校内掲示」については、「児童の関心」、「教師の願い」、「学習内容」に照らして多様な見方や考え方につながる「記事（テーマ）」を選択することが重要である。そのためにもこども新聞の定期購読や新聞社のデータベースはとても有効な手立てとなった。今後も「新聞が身近にある」環境を維持できるようにしていくことが肝要である。

（坂井　一）

担当NIEアドバイザー及び担当新聞通信社からの一言

1　担当NIEアドバイザー　新潟大学附属長岡小学校　指導教諭　関　慎太郎

研究会当日教室に入ると，「自分の考えを仲間に伝え，真剣に議論する姿」が目に飛び込んできました。越路小学校の先生方が子どもたちと紡いできた成果が“姿”として体現されていた瞬間です。私が参観させていただいた６年生道徳では，新聞記事「園児のピアス，母国の風習でも駄目？」を活用し，異なる文化や価値観をもつ保護者と，園児の安全を優先させる保育園側の立場の違いをもとに，入園の是非について白熱した議論が展開されました。

SNS での誹謗中傷やフェイク動画の拡散，さらには生成 AI による弊害が社会問題化する中，「考え，議論する道徳」によって子ども自身が最適解・納得解を導き出すプロセスは，予測不可能な社会を豊かにたくましく生き抜く資質能力を育む上で，非常に重要な学びと言えます。授業者だけではなく，“チーム学校”として組織的･計画的に研究を進めて来られた越路小学校の先生方のご尽力に敬意を表すると同時に，新聞を活用した先進的な授業をご提案いただいたことに感謝申し上げます。そして，今後も得られた知見と成果を活用し，越路の子どもたちのさらなる成長につながることを祈念しております。

2　担当新聞・通信社　　朝日新聞社新潟総局長　中島　一仁

６年生は，西アフリカの風習に従ってピアスをつけて保育園に通わせることが認められなかった事案を巡る親と園側双方の主張を取り上げた記事，４年生は，性別に関するアンコンシャスバイアスを取り上げた記事をそれぞれ教材に使っていました。

在日外国人との共存とジェンダーという，現代社会にあって最もホットなテーマに関して，新聞記事がうまく活用されていることに，新聞社に勤める者の一人としてうれしさを感じました。世の中で多くの人が，考えたり悩んだりして活発に議論が交わされているテーマについて，児童のみなさんたちも一生懸命に考えている姿が印象的でした。

児童一人ひとりが自身の考えを，黒板上の「心のものさし」に表明する授業方法も興味深かったです。はっきりと割り切れないテーマについて，先生の指導で多角的な考えが引き出され，児童が「ものさし」の位置を改めるところに今回の授業の核心を見た思いがしました。